

大学生の国語国文学の教養の現状

東京女子大学 笹淵 友一

私にお話をするようにと言いつけがありました。そのことからは、実は私の大学でこの二三年前から一般教育の中で総合コースというものをいたしております。その中で文学を一つの部門としてやっておりますので、そのことを一つ話してほしいということでありましたので、今日はそのことについて話してみたいと思います。

申すまでもなく、一般教育の中で、文学という学科は、それ自身として、通念の講義として数名のかたがたがやってくださっております。それはおそらく諸先生がたの大学のばあいと大体似ていると思います。そういうものと並行しまして、三年前から総合コースというものを計画しております。それは私の方は文理学部の方であります。文学部系統の方で六つのコースがありまして、哲学（宗教学を含んだような哲学であります）日本文学・英米文学・心理学・社会学それに史学のこの六つのコースがありまして、この六つのコースの者が協力して共通のテーマをそれぞれの部門から追究し、講義をする。これはどういう意図かと申しますと、ただ何かいろんなものを総合して、何かその渾然としたものをつくり

あげるというような意図ではありません。申すまでもなく、一年間にこの六つのコースがいたしますので、一つのコースが担当するという時間というのは約一カ月。時間的になおして約八時間ですから、ほんとうにわずかばかりのことです。まるでこまぎれを集めたようで、口のわるい人が、これはまぜごはんをこしらえるようなものではないかということをやったそうではありますが、実はそのこまぎれを寄せ集めて、まぜごはんを作るということではないのであります。言うまでもなく、文化というのは、それ／＼の領域の文化がお互に密接な関係をもっているのであります。しかしながら、その密接な関係をもちながら、しかもそれ／＼の独自の領域というものがあるわけで、先ほどのお話にも出てきましたように、あるいは歴史学と触れあう歴史と触れあっている、社会学とふれあう、哲学とふれあう。あるいは心理学の問題とふれあう……いろいろな問題と触れあっていますということには、いろんな文学の研究方法というものが、やゝ精神分析学的研究であるとか、歴史社会学派であるとか、そういったいゝんな、いわばスキルが存在することでも明らかかなことなっております。しかしながらそれと同時に、文学には文学の独自の領域がある。ただ文学というものを何か抽象的に概念規定するのでなく、具体的に他の文化現象との触れあいを確かめながら、しかも、その中で文学の占める場所というものがどういうところであるのか、ということがここで追究した

い問題なのであります。

またこれは、一般教育の中の文学でありますから、いわゆる国文学というような日本文学というようなそういう歴史的な問題には、あまり深入りすることをねらっているのではなくて、むしろ文学そのもの、文化の中における文学ということが目的なんです。これを一年の学生たちに向かってやりますのは、一つには、私の方はコース別に学生を入れるのではなくて、一年の終わりにそれらの専攻学科を選ばせるようになっているのでありますが、その専攻学科を選ばせるばあいに、ただ何かこういう学科で卒業した方が就職口がよかるうというようなことでなくて、ほんとうに自分の向かうべき道というものが何であるかということ、はっきり確認した上で選ばせたい。そういうような一つの教育的意図もあってやっていることなんです。そういうことも実は計画いたしました、そこで私も少し手伝うことを頼まれましたので、手伝うことをいたしておりますが、これは卒直に申しますと、単に学生が幼稚であって文学というものがどういうものであるかということがわからない、それで彼らを啓蒙するんだという、そういう気持ちばかりでは、実はないんであります。実はこれは、私自身にとりまして一つの問題なのであります。

言うまでもなく今日の文学研究というものが、先ほどにも

お話がありましたように、多岐的になっておる、そのことから文学研究のほんとうのあり方というのは一体どうなのか、ということには必ずしも若い学生諸君ばかりの問題ではなくして、われわれ年をとった者にとっても、やはり問題なんではないかと、私がかねがね思っております。そればかりではなく、もっと私の迷いを申してみますと、一体文学研究というもの、どういうところに果たして基盤をもって、それぞれの存在価値というものを主張することができるものか、一体文学を支える基盤は何なのか、そういうことも私にとって、一つの問題なのであります。文学というものは、日本文学というものは、長い歴史の伝統をもっておる、長い間受け継がれてきて、そして秀れた学者たちが出て、これを受け継いでいる以上、値うちがあるはずではないかと、今さらそんなことに迷いを起こす必要はないのかというように、考え方も、あるいはあるかもしれないかと、私にとつては、どんな学者がかつて出て、そしてそのことに精魂を傾けてやっただけで安心するわけにはいかないんであります。そういうことを、かねがね考えているんであります。こういう計画に喜んで参加してみました。

そこで具体的なやり方を少し申し上げてみますと、こういうふうに総合的にやりますので、テーマとしては、共通のテーマをとらないと具合が悪いのであります。それなりに文学は文学、社会学は社会学で違ったテーマをとってやりま

すと、それ／＼の学問のもっている性格というものが、はっきりしないのであります。特に共通なテーマをとって、それをそれ／＼の方向がやりますと、同じテーマであっても、これは非常にとりあつかい方が違ってくるということ、問題の設定がちがってくるということは、当然現われてくるわけでありますが、そこで、これは私の方には、女子大学でありますから、女性というテーマをとりあげたわけなんです。それは、女の人にとって女性とは何ぞやということ、自分自身の問題でありますから、そういうふうな問題をした。これは別に女性ばかりをとりあげなくて、男性にしたっていいんじゃないかという説も出たんですが、男性よりも女性の方が大事であろうと、女性ということは今とりあげて言うんであります。そういうふうなことで、さっき私が申し上げたように一つのねらいを持っているわけなんです、これにもう一つやり方を申しますと、これは受講者の人数にちょっと関係がありますけれども、非常に受講希望者が多いのであります、私の方では、一学年の定員が三百名をちょっと越えた程度でありますけれども、わりと受講者が多いものですから、それを大体しほって、二百名くらいにしておりますが、講義は、二百名を一度に集めてやります。ただそうなりますと、全く講演ふうになってしまいますので、これを矯正する方法をとっているんであります、これは、いわゆるチュートルメントといわれますが、いわゆるチューターを置いていま

す。これは卒業生であります、卒業して家庭にいる者もありますし、それからまた、現在助手などしている者などで、二百名に対してチューターを二十名つけたんです。そしてこれが学生といっしょに講義をきくんであります。そして、それが今度は学生に対してはチューターとして彼らの演習を指導する、いわば彼らの相談相手となるわけでありまして、それからまた、これは六つのコースが店開きするのでありますから、チューターは、たとえば、自分は国文学をやったから、国文学のところだけチューターになるということはできないのであります、すべての部門でチューターにならなければならぬ。そうすると当人にとっては、なか／＼大変なのであります、先生は自分の好きなことばかりしゃべっているからいいようなものですけれども、チューターの方は、そういうわけにはいけません。何もチューターは学生に教えなくてもいいんだと彼らのディスカッションの進行係を務めて、方向づけをすればいいんだと言われても、どうも卒業生にする、そういうわけにいかんらしいんです。多少はやっぱり一歩先に出るといふような自信がないと、どうもうまくいけません。そこでそのためにチューターのために研修会という、チューターだけが集まって、その講義の予告された参考書とか、何だかというものを読んで少しお互に、理解を深めておいて、そして学生の演習に臨むという、そういうような仕組みにいたしているわけであります。

これが講義者にとって非常いいことは、それはチューターがありますので、そのチューターがお互いの間にディスカッションをする。それからまた学生の演習の中にはいつていて学生の問題点というようなものはつきりさせる。そこで解決を与えるのが目的でなくて、問題点をつきりさせるということなのであります。そうしますと、その前の時間に、講義をした結果が、その反応が翌週には、すぐに返ってくるわけなのであります。そうしますと、そのつぎに講義をしようとしていました者は、その前の時間の講義に対する反応を意識に入れながら、それに対する答えをまず期待しながらつぎの講義にはいることができる、そういう意味で、人数は二百人以上の多数な人数ですけれども、非常にいつも交流しています。これは講義をする者にとっても非常に楽しみのある、やりがいのあることで、決して片側から話しかけるだけで、むこうからなしのつぶても返ってこないというようなこととは違った、やり甲斐のあるわけなんです。

そんなことで、今申し上げましたように、時間数としては、わずか八時間、教場としては、わずか八時間ぐらいのものですけれど、ねらいますところは、今申し上げましたように、文学についての知識をできるだけ豊富に学生に教え込むということではなくて、文学というものが、どういう性格のものであるか、そしてそれが、先ほど申しましたように、他の文化領域でどのような位置を占めているかということをし、

具体的に実感させるということがねらいでありますから、必ずしも、これはそうたくさんの時間は要しなくても、こまぎれにはならないように思うのであります。実際問題としますと、四回四つの作品をとりあげまして、この作品も最初は古典から近代の作品まで揃えておりましたけれど、どうもその後の問題の出方から申しますと、やはり近代の作品がよけい学生が鑑賞しますので、このごろでは近代の作品を主にとりあげておりますけれども、そういうような具体的な作品をとりあげてはいますけれども、ねらうところは文学についての、あれやこれやの知識を教えるのではなくて、文学そのものを考えさせるということにありますので、必ずしも時間はいくらだけではだめだとは言えないのではないかと。もっとも時間が多ければ多いほど結構なんです、必ずしも時間の多少がそう決定的なものでもないという気がしております。このようなことでやっておりますと、いろいろな反応によって、また他の領域において、他の教授の講義との関係によって、いろいろ／＼私自身気がつくことがあります。

実は、つい先だつてであります、この前期の間に日本文学と歴史学と社会学と、これだけの講義が前期に終わりましたので、そこでちょうどまたまたそのところ、三つの講義で共通にとりあげられるのが「家」の問題に触れるような講義。全体的にとりあげたわけではないんですが「家」にふれる側面があったのです。そこでまた一つ計画。その世話役

の方で計画して、三人の担当者に出てもらいましてパネルデ
イメカッションをやってもらったんです。そして改めて今度
「家」の問題をそれ〴〵の側面からとり上げるといふことを
やってみたんですが、実は私も、あとで考えてみれば当然の
ことのように思えるのですけれど、そこへ出てみて実は驚い
たのです。

まず社会学の人が話をし、それから歴史学の人に話をして
もらいましたが、これは文学というものが何もそういう
「家」の問題をとりあげること自体が本来の問題ではないと
私は考えるものですから、先にまわってもらって後になった
わけなんです、ここで私の興味を感じたことは、なるほど
社会学というものが「家」の問題をとり上げる。日本の近代
文学でもご存じのように自然主義文学はまったく家と個人と
の関係を問題にしているんじゃないかと言ってもいいくらい
に「家」というもの、家族制度というものが、重要な問題で
あることは言うまでもありませんが、しかし社会学がとりあ
げる家のとりあげ方というものは、まったく「家」というも
のの社会的機構、構成そのものでありまして、その中に生き
ている人間の生き方・モラル、あるいは主体的な人間性のあ
り方などというところは、社会学の場面からまったく落とされ
て登場しないということであります。

それからまた歴史学者がออกมาして歴史学担当の人がこうい
う話をしました。これはこの話の一部なんですけれども、深沢

七郎の「楳山節考」というものをとり上げて、そしてあの老
人が年をとって捨てられるというより、自から捨ててるんでき
れども、ああいう小説というものが日本の社会には存在し
なかった。そういう老人を捨てるといふ風習は、日本の
社会には事実上なかったんだ。「大和物語」あるいはその源
であるところの仏教説話というものから来ているんだとい
うことを話すと同時に、それがそのまゝ、文学批評になるよう
な、ちょうどそれは、その少しはかり前にテレビで「楳山節
考」を放送しましたから、ご覧になった方もいらっしやいま
しょうが、日本の社会にありもしなかったことを何の解釈も
なしに放送するということは、放送局の不見識だというのが、
歴史側の意見なんです。これは実は私は聞いていてびっくり
したんですが、こんな問題のしかたがあるんだらうか。文学
にとつては、それが事実あったことであらうと、なからう
と、そんなことはむろん問題にならないんでありまして、文
学が社会を反映するにしましても、ということが仮りに認め
られるとしても、そういう反映する現実というものは、歴史
家の反映する現実とは大へんちがったものであるといふこと
が、学生の前でかなりはっきりしたわけなんです。そういう
ようなことをいたしているわけなんです。

これは、まあ一つ試みなんです、いろ〴〵まだ反省しな
ければならない点もたくさんあります。第一チューターが悲
鳴をあげるんです。先生は自分の専門のことをしゃべって

ればいいようなものの、学生はもう忘れていた哲学の本などもう一ぺん開いてみなければならぬし、それかといつてもう、まるでかえって卒業生の方は知識がいまいになつてゐる。そういうものを一見識持っているような顔して出ていかねばならないのは、つらいといつて悲鳴をあげますけれども、しかし必ずしもそうではなくて、よくやつてはおりますけれども、なか／＼その点が問題だと思ひます。そこでこれはもう少し広げて、一般教育の中で、もう少しこういう総合コースというものを幾つか設定したいという考えもあります。

けれども、チューターの養成ということが、まだ第一の問題で、これが片づきませんと、教授の方はそろえても、なか／＼その方が十分でないというような状況でございます。そんなことを報告すればいいんじゃないかと思ひますので、このくらいのこといたします。

(補、笹淵友一先生がアメリカへご出張中でしたので録

音を文字化した原稿を見ただけませんでした。

先生の意に反するところがあるかもわかりません。

すべての責任は、当編集部にあります。)